

南風  
こまち

上越新幹線『Max とき306号』時刻		
新潟	07:19	発
燕三条	07:31	発
長岡	07:42	発
浦佐	07:55	発
越後湯沢	08:08	発
上毛高原	08:21	発
高崎	08:38	発
本庄早稲田	08:51	発
熊谷	09:01	発
大宮	09:14	発
上野	09:34	発
東京	09:40	終着

出典：交通新聞社『JR時刻表 2019年4月号』より

斜陽が丸の内のビジネス街を朱く染める。一七時、俺がいるオフィスに終業のチャイムが響いた。

「あくあ、今日も残業かあ」

俺は諦め顔で大きく伸びをした。パソコン相手の仕事はどうも性に合わない。

「信濃、今夜も残業か？」

「白馬先輩！いや、今夜は家に持って帰ります」

「トロい奴だな、はは」

白馬先輩は古風な男だった。いつもぼろっつい年季の入ったパソコンを仕事の友としている。それでいて仕事は早く、上司からの信頼も厚い。だがそこにはちよっとしたからくりがある。気に喰わない。

「ま、頑張ってくれたまえ。これもよろしく」

どさくさに紛れて書類の束を俺に押し付けて、さっさと出口に向かって行ってしまった。またこれだ。気に喰わないを通り越して、癪だ。

「よし、今夜は飲むか」

「先輩、忘れ物ですよ」

女性社員が声を掛け、黒い物体を渡す。

「あ、モバイルバッテリー。サンキュな、これが無いと仕事ができない」

「そんなバッテリーの上がりかけたオンボロパソコン、いい加減にどうにかしたらどうですか？」

「ちゃんと仕事が出来たら同じだろ、信濃？ トロい奴だ」

先輩は俺を残してさっさと行ってしまった。

\*

帰宅すると、妻の美佳が先に帰っていた。

\*

「また仕事を持って帰ってきたの？ 呆れた…」

「フン」

俺は機嫌悪く鼻を鳴らした。

「食事は？」

「今はいい。後で食べる」

「どうもここ最近、美佳とも上手く行っていない。元々共働きであまり夫婦の時間が取れていない。うだつが上まらない俺に愛想を尽かしたのだろうか。まあいい。今は早いとこ、押し付けられた仕事と残った仕事をやっつけなければ。」

「あゝあ、癪だ、癪だ」

酒場で飲んだくれる白馬先輩の幻想を、頭から追い払った。

ある日の事。俺は珍しく定時に仕事を終え、意気揚々と飲み屋街に足を運んでいった。美佳は今夜は出張で留守だ。

二月を目前に控えた頃で、街には雪が舞っていた。眩いネオンの明かりの中で、雪が煌めく。とても寒い。早く酒を飲んで暖まる事にしよう。

すっかり気持ちよくなって帰路につく。駅への近道：ラブホ街を通る事にした。いくら酒で暖まったとは言え、この凍えるような寒風は身に辛かった。

……まさかここで、ラブホに消える白馬と美佳の姿を見ると思わなかった。酔いはいつぺんに覚め、後に残ったのはどす黒い殺意だけだった。

白馬は翌朝も、何事も無かったかのように平然としていた。そして、いつものように仕事を押し付け、トロい奴呼ばわりをした。

殺意は日増しに強くなり、俺は次第に殺害計画を練り始めていた。ただ、なかなかいい方法が思いつかない。

とりあえず、白馬のプライベートからさりげなく探る事にした。私生活、仕事っぷり、その他諸々。何が使えるかは今のところ分からないが、とにかくあれこれと情報を集めていた。美佳への怒りも無かったわけでは無いが、さすがにかつては愛し合ったはずの仲だ。情くらいはある。白馬を殺したらさっさと別れようと決めた。

白馬との新潟出張を命じられたのは、二人の浮気を知ってからしばらくした後のことだった。

悩んだ挙句、白馬は自殺に見せかけて殺すことにした。溺死させよう。海に棄てるだけなら死体の後始末も楽だ。最初はごく普通に水道水で殺そうかと思ったが、カルキとかが検出されて他殺とばれては元も子も無い。また、新潟の海に沈めようと考えたが、それでは真っ先に俺が疑われてしまう。東京湾に沈めよう。東京湾の海水を用意することにした。

そして、三月の末。俺と白馬は東京駅にいた。道中ずつとこいつといると考えると眩暈がしそうだった。

『20番線、ご注意ください、上越新幹線』  
『07号』新潟行きが参ります…』

「行くぞ、信濃」  
白馬は俺を待たずに乗りこむ。俺も後に続く。海水が詰まって重たくなったキャリーケースが邪魔つけだった。苦勞して二階席に向かう。

「帰りの切符を渡しておきます。明日の七時一九分に新潟を出る『Mx』とき306号』です。俺は途中寄る所があるんで、新潟からはレンタカーで帰ります」

レンタカーで帰京するなど本当は面倒だったが、死体を運搬するのには一番マシな手段だった。会社には取引先回りを名目に手配を頼んでおいた。

八時二四分。白馬の最後の旅は、定刻通りスタートした。

これから殺される当の本人は、車中でもずっとパソコンとにらめっこしていた。

「あ、やべ。バッテリーが切れそうだ。信濃、モバイルバッテリーを貸してくれ」

列車はトンネルに突入する。窓が鏡になり、憎い男の顔が二つになった。

「コンセントを使えばいいじゃないですか」

「無いから頼んでいるんだ。使えん列車だ」

「はあ……モバイルバッテリーくらい自前で用意したらどうですか？」

「あるものは全部使い切った」

いけしゃあしゃあと言う白馬を、今ここで殺してやろうかと少し思った。まあ、バッテリーくらい冥土の土産にくれてやろう。網棚の上の荷物をこそこそと探る。

「しかし：何なんだよ、その大荷物は何？ さっき階段を上するときも散々重そうにしてただろ」

「俺には俺の都合があるんですよ」

海水が入っていることを知られてはまずい。既に計画は始まっている。これ以上余計な事を言われる前にバッテリーを渡す。白馬は黙って受け取った。

「あとはこの企画書を本社に転送して、と…いや、後でやるか」

再びパソコンと格闘する。さらに、これまた古めかしいガラパゴス携帯まで取り出した。

『まもなく、越後湯沢……』

トンネルの音響にかき消されそうなアナウンスが響いた。終点まで、もう少し時間がかかる。

\* \*  
新潟で商談を終え、レンタカーで宿へ向かう。寂れた  
ビホだ。フロントは無人で、少し待たされた。年若い  
たボーイが出てくる。カードキーを渡される。俺の部屋  
は白馬の隣だった。

部屋に入る。ざつと荷ほごきをしながらあれこれ見る。  
いざ殺人を執行しようにも、道具が無いと話にならない。  
浴室も見てみる。トイレと一緒にあったタイプだ。洗面  
台の栓には水垢がこびり付いていた。栓があるのは好都  
合だ。

キャリーケースから肝心の物を取り出す。二リットル  
のペットボトルが三本。中身は全部東京湾の海水だ。ば  
れないようにクローゼットの奥底にしまう。

白馬の部屋を訪ねる。  
「白馬先輩、近くに評判の良い居酒屋があるらしいです。  
行きませんか？」

「よし、行くか」  
とりあえずここまでは順調だ。夜闇が迫る中、二人で  
車に乗り込む。居酒屋までは結構距離がある。

「海の方にあるのか、寒いな」  
車を降りると冷たい風が俺達の頬を叩く。  
「もうじきです…ありました、あそこですよ」  
俺は赤提灯を指差す。暖簾をくぐり、席に通される。

「すいません、ノンアルのビールを一つ」  
「大将、俺には生を」  
ここでじゃんじゃん飲ませないとまずい。幸いこの店  
は酒の銘柄が多いようだった。おだてて機嫌を取り、こ  
びへつらう。内心反吐が出そうだったが、この男の行く  
末を思い描くといささか滑稽でもあった。

酒場でしこたま飲ませて、車へと乗せる。揺れが激し  
くなるようにわざと乱暴な運転で、あえて遠回りをして  
ホテルへと連れ帰る。そのまま白馬の部屋になだれ込み  
また強めの酒を飲ませる。

「うっふ…やべ、トイレ」  
白馬はとうとう堪え切れずにトイレへと駆け込んだ。  
俺も仕方なく付き添い、背中をさする。胃酸の臭いが鼻  
をつく。不愉快極まりない。だが、胃の内容物から死亡  
推定時刻がばれないようにするには、吐かせないことに  
は仕方ない。

やがて、とうとう待ちわびていた瞬間が来た。白馬は  
今、ベッドの上でだらしないびきをかいている。身支  
度は済ませようとしたと見え、モバイルバッテリーがコ  
ンセントに刺さっている。地獄に行くのに身支度なんぞ  
要らないだろうに。

自室から海水を持ってくる。洗面台に栓をして、注ぐ。  
洗面台はほぼ満杯になった。

「先輩…しようがないな…」  
万一間こえていても取り繕えるように適当な事を呟く。  
「うーん…」  
目を覚まさない。

「ほら、行きますよ…」  
俺は白馬を浴室に引きずる。そして…  
ためらいなく、白馬の頭を洗面台に突っ込む。勢いよ  
く海水が飛び散る。さすがに目を覚ましてじたばたと抵  
抗されたが、渾身の力を込めて押さえつける。

どれくらい時間が経っただろうか。いつのまにか白  
馬は死んでいた。

\* \*  
白馬を殺した後。俺にはやる事が山ほどあった。まず

は死体を体育座りするような格好にさせる。後で死体  
を棄てるのに、伸びたまま死後硬直されてはキャリーケ  
ースに入らないからだ。

次に、浴槽に冷水を張る。そこに死体を漬ける。間違  
っても肺の中に水道水が入ってはいけない。後で死体は  
海に棄てるのに、体内からカルキとかが検出されたらお  
かしいからだ。逆に、洗面器に海水の成分が残っていた  
ら大事だ。丁寧にしつこく洗う。部屋にもガンガンに冷  
房をかける。死体はみるみるうちに冷えていった。これ  
なら死亡推定時刻も誤魔化せるだろう。東京湾に死体を  
棄てるまでは、白馬は生きていた事にしなければならな  
い。

夜が明けた。まだまだやる事は多い。とりあえず本社  
に電話をかける。下手に指紋が付かないようにハンカチ  
で白馬の携帯を包む。しゃがれた声を出して、風邪で出  
社できなくなったと誤魔化す。相手には俺だと判別でき  
まい。通話履歴から怪しまれる事も無い。帰りの新幹線  
の切符も回収する。後で細切れにして棄てよう。

フロントでチェックアウトを済ませる。白馬本人は別  
件で今朝早く発ったと適当に誤魔化しておいた。ボーイ  
が親切にもキャリーケースを持ってくれようとしたが、  
丁重にお断りする。さすがに死体が入った荷物を持たせ  
るわけにはいかない。

やっこのことで車に乗り込み、ため息をつく。人を一  
人殺すのが、ここまで大変だとは思わなかった。  
何食わぬ顔で帰路につく。快調に高速を飛ばす。しか  
し、大事な事を思い出した。

……あとはこの企画書を本社に転送して、と…いや、  
後でやるか……。  
そう、パソコンの中の転送ファイルだ。いくら風邪で

寝込んでいても、さすがにファイル転送くらいはできる。遺された仕事を片付けるために急遽、俺は途中のサービスエリアに寄る事にした。白馬のパソコンから送るため、送り主は白馬としか考えられない。生存証明の一部になるだろう。

幸いにも、サービスエリアはがら空きだった。指紋が付かないように手袋を嵌めているのを見られて怪しまれる事は無さそうだった。オンボロパソコンとコンセントをつなぎ、立ち上げる。プライベートをあれこれ探っていた事が幸いして、パスワード解除なんて簡単だった。お目当てのファイルを見つける。

「送信」と  
企画書ファイルがメールに乗って送信されたのを確認してから、シャットダウンする。車に戻り、再び出発。『時刻は八時一五分になりました、この時間のニュースをお伝えします……』

カーラジオを聞き流しながら、今日最初の取引先を目指す。東京へは、まだ先が長い。  
何軒か得意先に顔を出し、帰京したのは夕方だった。死体を俺の車のトランクに放り投げ、レンタカーを返却する。

そして夜、東京湾。体育座りのままコチョコチになった死体を仰向けにさせるのは難儀だった。簡単に死体が浮かんでこないように、大きめの石を結わえ付ける。そして、棄てる。死体は暗い水底へと消えた。最後に、白馬の靴を防波堤の上に揃えて自殺を演出する。そのまま俺は古なじみの家に向かう。アライバイ工作もこれで上等だろう。

\* \* \*

数日後。家に刑事が訪ねてきた。とりあえず茶を出す。

大丈夫、堂々としていればいい。  
「先日、あなたの会社の先輩である白馬淳一氏が遺体で発見されました」  
「そんな……」

絶句し、驚愕を装う。下手な事は言えない。言葉少なに徹する。

「場所は東京湾、死因は溺死でした。現在、殺人事件として捜査しています」

……え!?

どこかでミスをしたのだろうか。心臓が早鐘を打つ。

「被害者と生前、最後に一緒にいたあなたに協力をお願いしたいのです」

まだ、俺が殺したとはばれてないようだ。内心安堵するが、自殺の可能性も聞かずすんなりと捜査に協力するのもおかしい気がする。

「自殺ではないんですか?」

「当初は我々もその線をメインで考えていましたし、今もその可能性は完全には捨てていません。ですが、殺人事件と疑うに値する不審な点がありました。その部分を解明するためにも、ご協力を」

「そういう事でしたら、……ええ、何でも聞いてください」

「ここでどうかして自殺の線に持っていかななくてはならない。俺は努めて冷静になろうとした。」

「話が早くて助かります。では遠慮なく」

刑事は茶を啜る。

「白馬さんを殺害したのは信濃さん、あなたですか?」

沈黙。

「いえ、違います」

「白馬氏の遺体は溺死で、それについては特に不審な点

はありませんでした。問題は遺留品……パソコンとモバイルバッテリーです」

「と、言いますと?」

「白馬さんは新潟出張の後、上越新幹線『Max』とき306号』で帰京したと報告が上がっています。その列車には監視カメラが無いので確認は取れていませんが。彼はよく働き、上司からの信頼も厚い。当然、車中でもパソコンで仕事をするでしょう」

よく働き、だと? 俺はカチンときたが、ぐっと堪える。

「ええ、そうでしょうね。新潟に向かう際も仕事をしていました」

「その時、電源は何を使っていましたか?」

「確か……モバイルバッテリーだったかと」

「やはりそうですか。当該列車の座席にはモバイルコンセントがありません。必然的に電力供給を内蔵バッテリー、あるいはモバイルバッテリーに頼らざるを得ません。しかし、調べたところそのいずれもほとんど放電していませんでした。いずれも使われなかった……つまり、新幹線の車内で白馬氏は仕事をしていなかったという事になりますな。白馬氏らしくない」

俺は内心焦った。

「そうなんですか……でも、今どきバッテリーなんてコンビニとかでも簡単に手に入ります。そこで売られている物を使ったのではないですか?」

「可能性は低いです捨てるできません。現在調査中です。しかし、もっと大事な事があるんですよ」

「……と、言いますと?」

「白馬氏のパソコンからファイルが送られたのは八時一〇分でした。ちょうど、白馬氏が乗っていた列車が越後

湯沢駅を出た直後です」

刑事はスマホを開いて、時刻表のサイトを見せる。

「『X』とき306号』は、越後湯沢駅を八時八分に出発します。白馬氏が乗車した日は定刻通りに駅を発車しています。さて、本題はここからです。上越新幹線の上り列車は越後湯沢を出た直後にトンネルに入ります。大清水トンネルと言いまして、全長は二二〇〇メートル以上。ファイルが送信された八時一〇分時点で、列車はトンネルの中にいます。トンネルの中は電波が届きませんから、当然ファイルを本社に送信することは不可能です。それなのに：現にファイルは八時一〇分に送信されています」

俺は動揺した。

……ヤバイ。

「ここから考えられる事は二つです。まず一つ。白馬氏が愛用のパソコンをあなたに預け、あなたがどこか電波が届く環境で会社に送信した。しかしそんなことあり得ませんか？ パソコンには重要な情報がぎっしり詰まっています。誰かに操作を預けるなど考えられません。となるともう一つの可能性に行き当たります。ファイルを送信したのはあなたが、白馬氏はそれに抵抗する術を持っていなかった」

真綿でじわじわと首を絞めるように、刑事は言葉を紡ぐ。

「白馬氏は列車に乗らなかつたと考えるのが自然でしょうな。となると、あなたの証言には虚偽が混じっているということになります。なぜあなたが嘘を吐いたのか：想像には難くありません」

俺は黙っていた。まだこの刑事は俺のアリバイを崩していない。下手な反論はせずに、ただ堂々としているの

がいいだろう。

「もちろん、あなたにはアリバイがありません。ですが、死体を温めたり冷やしたりすれば、死亡推定時刻は割と簡単にずらすことが可能です。我々警察が修正して割り出した死亡推定時刻に、あなたがどこで何をしていたのかは後でじっくりお聞かせ願います。それにですね……八時一〇分に白馬のパソコンからファイルを送送することができたのは、一緒に新潟出張に行っていて、パソコンを手に入れる機会があったただけなんですよ」

刑事は再び茶を啜り、言う。

「信濃さん、もう一度お尋ねします。白馬氏を殺害したのはあなたですか？」

トロい男だ……頭の中で、白馬の幻聴が聞こえたような気がした。

\*注1：本作品はフィクションである。作中に登場する人物、団体その他は現実と一切無関係である。

\*注2：本作品に登場した大清水トンネルでは、2019年4月より携帯電話の通話サービスが使用可能である。なお余談ながら、並走する上越線の清水トンネルは、川端康成の小説『雪国』冒頭の「国境の長いトンネル」であると言われている。